

治療期のがん患者の配偶者に関する研究の動向と課題

吉原 祥子

キーワード：がん患者，がん，配偶者，治療期

I. 緒言

医療の進歩に伴い，がんの5年生存率は67.6%と延長した¹⁾。がん患者の家族は患者が置かれている厳しい現実を知らされてから絶え間ない苦しみとともに生きている²⁾ことが明らかにされているように，家族は，患者ががんと診断された時期から，手術や化学療法などの治療を受ける時期，積極的治療が終了となりサポート型ケアが中心となる終末期と，その時々苦しみが生じる。その中でも，近年は生存率の延長，医療施設から在宅への療養の場の移行といった社会背景から，治療を受けながら社会で生活する治療期の患者が多いことが予測される。通院しながら生活するがん患者が，調整しようとしていることがうまく出来るように手助けしてくれる人や精神的に支えとなる人の存在が，患者の調整力の発揮を促進することが示唆されており³⁾，治療期の患者が，変化した身体や生活を調整していくには，身近な家族の支援が必要であり，特に夫婦は仕事や家事など役割を分担しながら生活していることから，配偶者への支援は，がん患者が，がんと共によりよく生きることに繋がると考えられる。そこで，本研究では，治療期のがん患者の配偶者に焦点を当て，研究の動向と課題を明らかにすることを目的とした。

II. 用語の定義

1. 治療期のがん患者：手術療法・薬物療法・放射線療法などの積極的治療を受けているがん患者とした。

III. 研究方法

1. 文献検索の方法

医学中央雑誌Web版 (Ver.5) を使用し，「がん患者 or がん」「配偶者」のキーワードで検索し (該当829件)，

原著論文，抄録あり，看護，成人期以降に絞り込んだところ195件が抽出された。次に，195件の抄録を概観し，対象者に配偶者以外が含まれているもの，看護以外の視点で書かれているもの，抄録集や論文集，事例研究を除いた27件を「がん患者の配偶者に関する文献」とした。さらに，27文献の内容を読み，手術療法・薬物療法・放射線療法などの治療を行っている患者の配偶者が対象となっている8件を，「治療期のがん患者の配偶者に関する文献」とした。

2. 分析方法

まず，27文献の論文数の年次推移と概要を整理し，「がん患者の配偶者に関する文献」の中で「治療期のがん患者の配偶者に関する文献」がどのような位置づけにあるのかを概観した。次に「治療期」の文献を熟読し，発表年，研究目的，研究方法，対象者の性別・年齢，患者の癌種・治療内容・治療の場，結果・考察を表にまとめ，研究の動向と課題について分析・考察した。

IV. 結果

1. 「がん患者の配偶者に関する文献」の中の「治療期の文献」の位置づけ (表1)

「がん患者の配偶者に関する文献」は27件であり，1996年の報告数は1件，1997年から2001年までの6年間0件，2002～2006年までは年間0～1件，2007年以降は複数件報告されるようになり，2007年・2012年が年間3件，2015年・2017年が4件，2009年が5件と最も多かった。その中で「治療期のがん患者の配偶者に関する文献」は8件で (文献番号に*をつけた)，2005年以降にみられており，2012年の2件が最も多くそれ以外の年は2～3年に1～2件の文献が報告されている。内容は，治療期の心理 (No6,12,13,14,21)，治療期の取り組み (No5,23)，治療期のQOL (No17) であった。

治療期以外19件の内容は，終末期に焦点を当てた文献が11件と最も多く，在宅介護体験 (No2,4,15,18)，心理

Shoko Yoshihara

昭和大学保健医療学部看護学科

表1 がん患者の配偶者に関する文献

文献番号	年	タイトル	著者	出典
1	2018	配偶子を亡くした高齢者の看取りの思いと医療者からの情報提供との関連	細貝瑞穂, 福岡美紀, 長田京子.	島根大学医学部紀要, 40, 27-35.
2	2017	在宅でがん患者を看取った配偶者が死別後に捉える介護体験とその意味づけに関する研究	加利川真理	家族看護学研究, 23 (1), 39-51.
3	2017	難治性がん患者と共に歩む配偶者が新たな役割を形成するプロセス	菊地沙織, 神田清子.	日本看護研究会雑誌, 40 (5), 759-770.
4	2017	終末期がん療養者の満足な在宅看取りを行った配偶者の介護体験	尾形由紀子, 岡田麻里, 襟直美, 他	日本地域看護学会誌, 20 (2), 64-72.
5*	2017	化学放射線療法を行った食道がん患者の配偶者における食への取り組み	加藤由希子, 植田喜久子, 中信利恵子.	日本赤十字広島看護大学紀要, 17, 19-27.
6*	2015	前立腺がん患者の配偶者の援助要請内容	掛屋純子, 掛橋千賀子, 常義政	新見公立大学紀要, 36, 75-78.
7	2015	進行卵巣がんの妻と療養を共にした壮年期配偶者の体験 2人の遺族の分析	松井利江, 福田陽子, 布谷麻耶	天理医療大学紀要, 3 (1), 16-24.
8	2015	がん患者の配偶者が患者の療養プロセスにおいて体験した困難への対処	大久保仁司	ホスピスケアと在宅ケア, 23 (3), 373-377.
9	2015	肺がん患者の治療過程において「bad news」を伝えられた配偶者の心理的ストレス反応-病期における差異とその影響要因-	釘本とよ子, 古賀明美.	日本がん看護学会誌, 29 (1), 54-61.
10	2013	がん患者の療養プロセスで配偶者が体験した困難	大久保仁司	ホスピスケアと在宅ケア, 21 (1), 29-35.
11	2012	がん患者の配偶者のソーシャル・サポートに関する体験	青柳道子	日本がん看護学会誌, 26 (3), 71-80.
12*	2012	乳がん患者の診断から初回治療終了までの配偶者の認識と対処行動	菅原よしえ, 森一恵	日本がん看護学会誌, 26 (3), 34-43.
13*	2012	造血幹細胞移植を選択した白血病患者に寄り添う配偶者の心理的変遷	後藤真美子, 奥津文子	人間看護学研究, 10, 67-75.
14*	2011	外来治療移行時期におけるがん患者の妻が抱える不安と希望するサポート	笹川寿美, 光木幸子, 毛利貴子, 他	京都府立医科大学看護学科紀要, 21, 85-93.
15	2009	高齢終末期がん患者を在宅介護する配偶者の生活世界	東清巳	家族看護学研究, 15 (2), 99-106.
16	2009	終末期がん患者を看病する配偶者のストレス-対処過程	加藤亜妃子, 水野道代	日本がん看護学会誌, 23 (3), 4-13.
17*	2009	胃がん術後患者の配偶者のQOLに対するソーシャル・サポートの影響	小林愛, 宮下美香	日本がん看護学会誌, 23 (2), 4-12.
18	2009	がんターミナル期の夫を在宅で介護し看取った女性配偶者の看取り体験の分析	蒔田寛子, 大石和子, 山村江美子, 他	家族看護学研究, 15 (1), 51-57.
19	2009	死を迎えた再発乳がん患者の配偶者(夫)の思いと希望	実藤基子	死の臨床, 32 (1), 123-129.
20	2007	末期がんの夫との死別過程における妻の心理変化 壮年期にあたる妻に焦点を当てて	名越恵美, 甚田愛, 林みつる, 他	インターナショナル nursing research, 6 (1), 93-99.
21*	2007	外来で化学療法を受ける進行・再発消化器がん患者の配偶者が知覚している困難と肯定感	二井谷真由美, 宮下美香, 森山美知子	日本がん看護学会誌, 21 (2), 62-67.
22	2007	終末期がん患者の妻の苦悩の変容	名越恵美, 三宅真知子, 松本啓子	看護・保健科学研究誌, 7 (2), 165-171.
23*	2005	胃がんによる胃切除術患者の妻における食への取り組み	北川恵, 吉永喜久恵	日本がん看護学会誌, 19 (2), 74-80.
24	2004	伝えていない真実のあるがん患者とその配偶者のコミュニケーション	池田久乃	日本がん看護学会誌, 18 (1), 36-45.
25	2003	一般病棟で成人がん患者と死別した配偶者の悲嘆過程におけるセルフケア	浅野美知恵, 佐藤禮子	ナーシング, 23 (6), 168-174.
26	2002	ホスピス入院中の患者の配偶者が行う予期的悲嘆の特徴	畠山とも子	日本がん看護学会誌, 16 (1), 39-48.
27	1996	がんを体験している夫に付き添う妻が夫の病気の意味を見出していく過程に関する研究	藤田佐和	高知女子大学紀要, 44, 91-107.

*治療期のがん患者の配偶者に関する文献

や悲嘆 (No1,16,19,20,22,27,25,26) であった。また、療養過程における体験や心理 (No7,8,9,10) について書かれている文献が4件、その他、役割形成のプロセス (No3), ソーシャルサポートに関する体験 (No11), 患者とのコミュニケーション (No24) といった内容があった。

2. 治療期のがん患者の配偶者に関する文献 (表2)

1) 研究方法

質的研究が6件、量的研究が2件であった。

2) 対象者の性別 (続柄), 年齢

対象者を女性 (妻) に特定している文献は4件で、男性 (夫) に特定している文献は1件であった。それ以外の3文献は性別の特定はしていなかったが、対象者の内訳をみると男性よりも女性の人数の方が多かった。対象者の年齢は、40~70歳代であり、60歳代が多かった。

3) 患者の癌種・治療内容・治療の場

患者の癌種を特定していた文献は、胃がん2件、その他は1件ずつで、食道がん、前立腺がん、乳がん、白血病であった。

患者の治療内容が特定されていた文献は、手術が2件で両方とも胃切除であった。薬物療法は、ホルモン療法と化学療法が1件ずつであった。また、化学放射線療法、移植が1件ずつあった。それ以外は、複数の治療を受けている患者の配偶者を対象としていた。

治療の場は、外来通院中や在宅療養中の文献が6件あり、入院中と退院後のデータを用いて分析した文献が1件、治療の場を明記していない文献は2件であった。

4) 研究内容

心理面に焦点を当てた文献が5件と多かった。その中で、困っていること、不安といったネガティブな側面のみを記していた文献は2件で、前立腺がんのホルモン療法を受けている患者の配偶者の困っていること (No6), 外来治療移行期における妻の不安 (No14) があった。No21は外来化学療法を受ける進行消化器がん患者の配偶者が知覚している困難と肯定感といったポジティブな面にも焦点をあて、肯定感を見いだせる援助の必要性の示唆につなげていた。また、心理過程について述べた内容の研究は2件で、がんの診断から初回治療終了までの認識 (No12) や、治療過程で辿った心理過程について述べたもの (No13) があった。

配偶者の取り組みに関する文献が2件あり、食道がん

で化学放射線療法を受けた患者、胃がんの手術を受けた患者へ配偶者がどのような食への取り組みをしていたかを明らかにしていたものであった (No5, No23)。

QOLに関する研究が1件あり、配偶者のQOLがソーシャルサポートにどう影響したかを明らかにしたものであった (No17)。

V. 考察

1. 治療期のがん患者の配偶者に関する文献の動向

1) 文献数

まず、「がん患者の配偶者に関する文献」27件中、「治療期の配偶者に関する文献」は8件と3割弱にとどまった。また、「治療期のがん患者の配偶者に関する文献」は1996年の最初の文献から9年後の2005年以降に見られ、2~3年に1~2件で、2017年まで定期的に見られている。これは、在院日数の短縮や外来で化学療法加算が算定されるようになるなど、治療の場が入院から外来へシフトしていること、がん生存率の上昇でがんと共に生活する人が増加していることが、研究につながったと考えられる。しかし、研究数は決して多くはなく、今後増え続けることが予測される治療期の患者の配偶者を支援するために、さらに研究が進むことが望まれる。

2) 対象者と患者の背景

患者の性別をみると、男性の配偶者に焦点を当てた文献は1件のみで、性別を特定していない文献でも、対象者は女性の数が多かった。がん罹患患者数は男性に多く、家事や介護を女性が担うことが多いため、女性が対象になりやすいと考えられた。しかし、No12では男性配偶者のショックや心配が記されており、また、男性配偶者は男性性を重視する価値観や他者からの支援を受けることへの抵抗感が存在していることが示唆されている⁴⁾。まだ顕在化していない男性特有の悩みや思いを知るためには、さらに男性配偶者に関する知見も必要であろう。

患者の癌種が特定されていたものは、胃がん、乳がん、前立腺がん、罹患患者数の上位で、比較的生存率が高いがんであった。これらは治療期が長期に及ぶことから研究が進んだと予測できた。しかし、肺がんや大腸がん、子宮がんなど罹患患者数が多いがんは他にもある。また、今回のNo5, 23では治療による食への取り組みが記されている。罹患患者数や生存率が高くなくとも、治療の有害事象を生活の中でマネジメントしなければならぬ治療期の患者と共に生活する配偶者への支援のためには、様々な癌腫や治療法を受ける患者の配偶者など、幅広い

表2 治療期のがん患者の配偶者に関する文献

文献* 番号	年	目的	研究 方法	対象者		患者の癌種・治療内容・治療の場			結果・考察
				性別・続柄	(人数), 年齢				
5	2017	化学放射線療法を行った食道がん患者の配偶者における食への取り組みを明らかにする。	質的	妻(5)	61~73歳 平均:69歳	食道がん	化学放射線療法	在宅	配偶者の食への取り組みは《夫を支えようと思決定する》《食情報を取り入れ実行・評価する》《食道がんの夫と共に生きる》の3つの局面が明らかとなった。配偶者は一人で食情報を探し求め、試行錯誤や葛藤しながら夫の摂取状況や活動状況、言動や回復状況を詳細に観察、評価し続け、夫のQOL向上を目指して支援していた。
6	2015	前立腺がん患者の配偶者の援助要請内容について明らかにする。	質的	妻(3)	70歳代, 40歳代	前立腺がん	ホルモン療法	外来	現在困っていることは、【身体的問題】〈排尿の問題〉〈ホットフラッシュによる身体的な変化〉、【高齢者ならではの困難】〈認知機能の低下〉〈加齢に伴う身体面的変化〉、【環境的な問題】〈通院手段の問題〉〈遠方での生活拠点〉の3カテゴリーが、必要とする支援として【身体的な支援の必要性】【社会的支援の必要性】【家族も含めた精神的支援の必要性】の3カテゴリーが構成された。
12	2012	乳がん患者の配偶者が妻のがんの診断、初回治療においてどのような認識を持ち、対処や行動を取っているかを明らかにし、看護支援の必要性や方法について明らかにする。	質的	夫(6)	50~60歳代	乳がん	手術療法 放射線療法 化学療法 ホルモン療法	明記なし	乳癌患者の診断から初回治療終了までの配偶者の認識として、《乳がんの診断は思いがけないショックな出来事》《乳がんは再発や転移が心配であり、医師による専門的な治療が必要である》《病気や治療による妻への影響が心配である》《乳がんによる女性特有のことについては夫は話しにくい》など8つのカテゴリーが抽出された。対処行動として《病気に関する情報収集をする》《妻の気持ちを安定させるために努力する》《親や親戚の心理的負担を考慮して乳がん罹患について伝える》《周囲の支援を活用して妻の役割負担を軽減する》の4カテゴリーが抽出された。
13	2012	造血幹細胞移植治療を選択した患者に寄り添う配偶者がどのような心理過程をたどったのかを明らかにする。	質的	女性(2) 男性(1)	50歳代, 40歳代	白血病	移植	明記なし	造血幹細胞移植を選択した白血病患者に寄り添う配偶者の心理的変遷は、[患者の突然の入院による衝撃][患者本人の情報希求のタイプに合わせようとする気持ち][患者との気持ちのズレに苛立つ気持ち][肉体的・精神的疲弊に追い打ちをかける経済的な問題][表出できない複雑な気持ち][心のよりどころとしての看護師への思いの表出][考え方の転換]があった。

文献 番号	年	目的	研究 方法	対象者		患者の癌種・治療内容・治療の場			結果・考察
				性別・続柄 (人数)	年齢 (人数), 年齢				
14	2011	外来治療移行期におけるがん患者の妻が抱える不安と希望するサポートを明らかにする。	量的	妻 (81)	50~70歳代 平均: 62.2 ±9.3歳	消化器がん, 腎・泌尿器がん, 呼吸器がん	手術療法 化学療法 放射線療法 代替療法 ホルモン療法	外来	がん患者の妻が抱える不安は、病気の予後・病状・症状・治療に関する内容と、病気に関する内容が多かった。しかし、患者やその妻の悩みや不安に対応しているのは家族や身内であり、十分に専門職を活用されていない現状があった。
17	2009	胃がん術後患者の配偶者のQOLに対するソーシャルサポートの影響を明らかにする。	量的	男性 (18) 女性 (32)	60~70歳代 平均: 65.3 ±10.4歳	胃がん	手術	外来	精神的健康を目的変数としたモデルにおいて、配偶者から受け取るサポートに有意な正の影響、依存性を有することに負の影響がある傾向が見出された。同様に精神的健康を目的変数としたモデルにおいて、家族から受け取るサポートに有意な正の影響、依存性を有することに負の影響がある傾向が示された。胃がん術後患者の配偶者のQOLは患者より提供されるサポートにより高められることが示唆された。
21	2007	外科外来で化学療法を受ける進行・再発消化器がん患者の配偶者が生活の中でどのような困難や肯定感を自覚しているかを明らかにする。	質的	男性 (4) 女性 (16)	50~70歳代 平均: 62 ±9.3歳	食道がん, 胃がん, 大腸がん, 肝臓がん, 胆のうがん, 膵臓がん	外来化学療法	外来	配偶者が知覚している困難には『自分の思いが配偶者に通じない』『医師の対応』『経済的な負担』『今後の不安』『つらそうな患者を目の当たりにすること』『疾患治療を理解すること』『病気になって変わった配偶者を受け入れられない』『治療への迷い』があった。肯定感には『家族の凝集性の高まり』『二人で共有する時間の増加』『病前と変わらない日常性の継続』『患者の満足』『前向きに生活を楽しむ』『パートナーへの感謝』があった。
23	2005	入院中から退院後1か月の環境移行期において、患者と食を共にする妻がどのような食への取り組みをしているかを明らかにし看護支援への示唆を得る。	質的	妻 (8)	50~70歳代 平均: 63.9 ±6.62歳	胃がん	手術療法	入院 と 外来	胃切除後患者の妻における入院中の食への取り組みには【新たな食事管理の役割行動の開始】として《食事管理に対する後悔と自身のなさ》という認知と、《夫に合った胃切除食の内容を学習する》《夫の回復を促す健康管理を行う》《他者からのサポートを調整する》行動がみられた。退院後の取り組みには、【食事管理行動の拡大】【負担を乗り越える】として《食事管理行動への負担感》《安心感》という認知と、《夫の胃や体調に合う食事を試行錯誤で試す》《夫の回復を促す健康管理を行う》《他者からのサポートを調整する》《負担を乗り越える》行動が見られた。

※文献番号は表1と連動している

対象に研究が広がるとよい。

3) 文献内容

文献内容は、配偶者の心理面を明らかにしていたものが多かった。困っていることや不安、困難や肯定感、心理過程などを質的に分析しているものが多く、詳細な記述がされていた。これらの結果は看護の示唆につながっているが、どのタイミングでどのように関わるかが、配偶者の困難や不安の軽減につながるかといった、具体的な援助方法には至っていない。よって、今後はこれらのプログラム開発など、具体的な援助につながる研究に発展していくことが配偶者支援の実際につながると考えられる。

No.5, 23では、配偶者の取り組みが明らかになっており、術後や治療後の後遺症や副作用の患者のセルフマネジメントに配偶者が大きく関与していることが示唆されている。がんと共に生きる時間が長期化している現在、患者のがんのケアや管理に関与せざるを得ない配偶者のQOLが維持向上出来るよう、具体的な援助につながる研究が求められる。そのためには、配偶者の置かれている実態の解明に止まらず、介入による検証なども必要となろう。

VI. 結論

対象文献の結果から、治療期におけるがん患者の配偶者に関する研究の動向と課題は以下のとおりである。

1. がん患者の配偶者に関する文献のうち治療期に関する

文献は8件と3割にとどまった。

2. 女性（妻）が対象者となっている研究が多く、男性の配偶者を対象とした研究は少ない傾向にあった。
3. 対象となっていた患者の疾患は、がん罹患率、生存率が上位のがんが多かった。
4. 研究内容は、配偶者の心理や取り組みなどの実際が明らかとなっていた。
5. 今後は、さらに幅広い対象に研究が行われることや、配偶者の困難や不安の改善やQOLの維持向上に向けた具体的なプログラムの開発や、介入研究が必要である。

引用文献

- 1) がん統計 (2017). 全国がんセンター協議会加盟施設における5年・10年生存率, 2018年3月29日, https://ganjoho.jp/data/reg_stat/statistics/brochure/2017/cancer_statistics_2017_date_J.pdf
- 2) 瀬山留加, 武居明美, 神田清子: 進行がん患者の家族が抱える苦しみの検討, 日本看護研究学会雑誌, 36(2), 79-86, 2013.
- 3) 廣川恵子: 通院しながら生活するがん患者の調整力と調整力に関連する事柄, 川崎医療福祉学会誌, 26(1), 25-35, 2016.
- 4) 富田真紀子, 高橋都, 多賀谷信美, 他: 乳がん患者の夫の心身不調と相談行動, 緩和ケア, 24(5), 394-400, 2014.